

九州大学看護共創・実装研究拠点設置による 九大看護のブランディングの構築

医学研究院保健学部部門看護学分野

橋口暢子 嶋野洋子 藤田君支 諸隈誠一 後藤健一 寺岡佐和 疋田直子

九州大学病院 看護部

濱田正美 渡邊則子

研究拠点設置の背景

看護学分野における
課題・強味

【教育・研究上の課題】

国家資格取得に向けた教育
エフォート大
(研究時間の確保困難)

(教育組織を基盤とした講座)
研究における教員間の
連携協働のハードルの存在

科学研究費取得率
(70%/2023年度)

九州大学病院看護部
との強固な連携
(卒業生の就職率74%)
全国トップクラス

保健・医療および
教育をとりまく変化

看護基礎教育の大学化促進
→優秀な学生獲得に向けた
取り組み
(H3:11校→R5:283校26倍)

デジタル技術、ビッグ
データ活用による高度な
ヘルスケアシステムの構築要

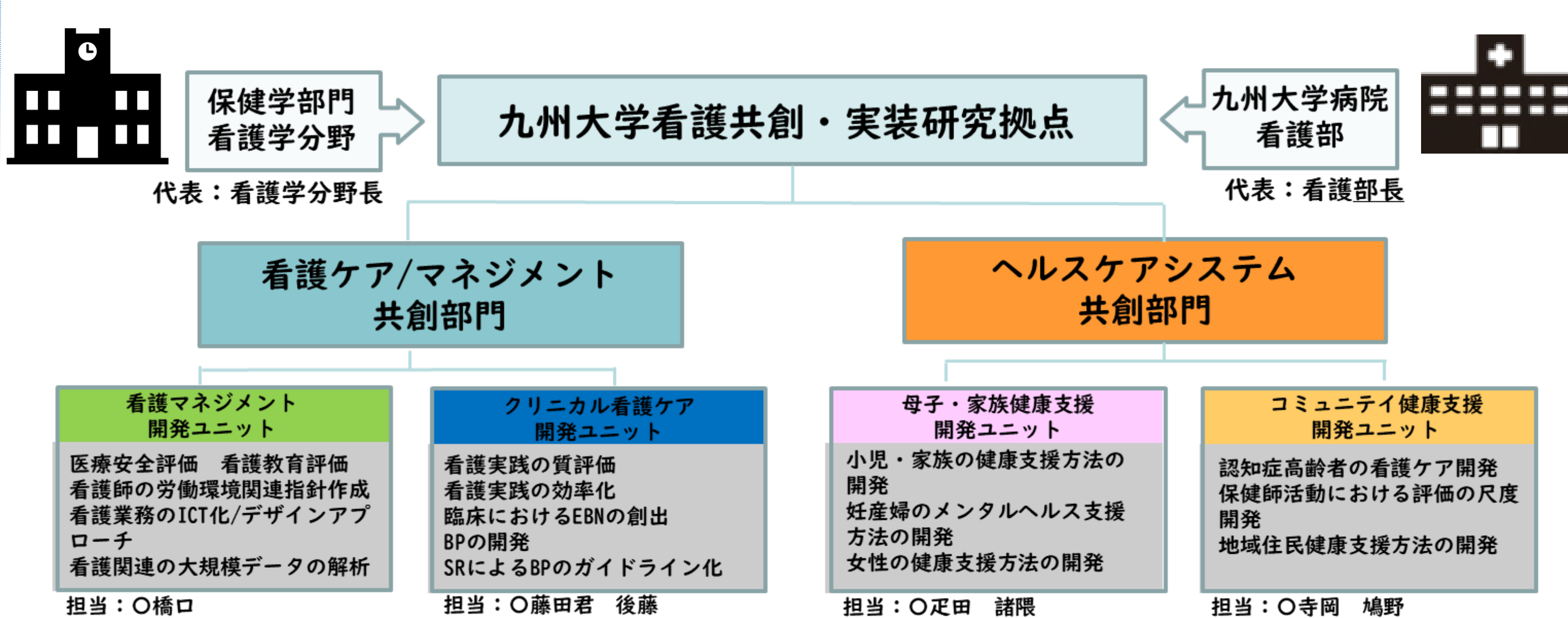
基礎研究⇒EBNの構築
⇒地域/臨床での実装への展開

看護学分野と九州大学病院看護部、および地域・企業との
共同研究推進基盤形成

九大発の魅力ある看護を発信

研究拠点の概要

研究拠点組織図



社会実装に向けたBest Practiceの創出

臨床/地域における社会実装

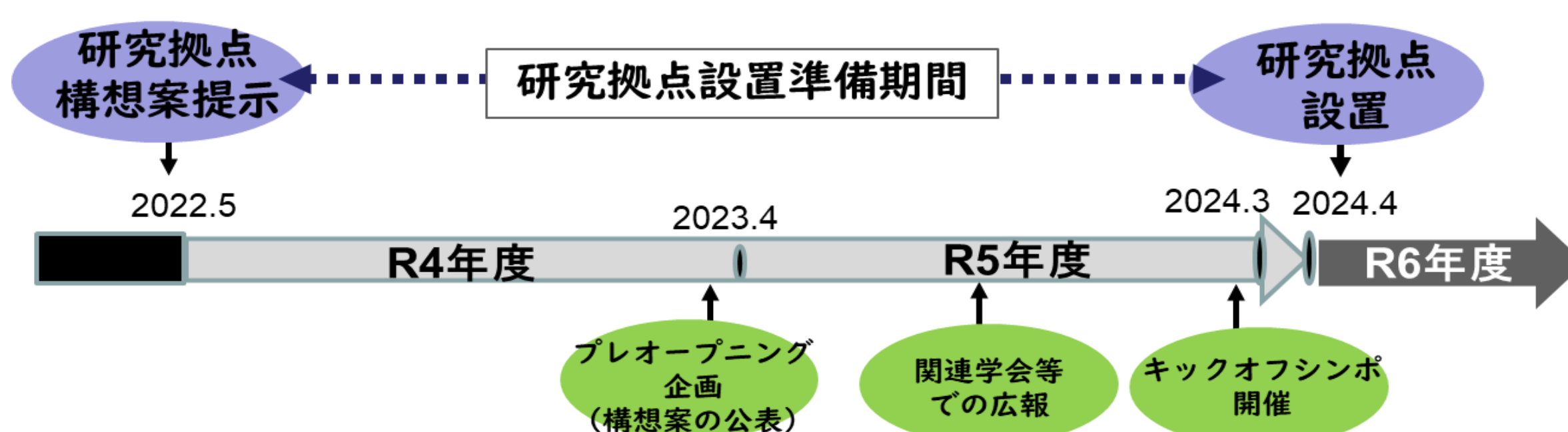
看護実践の国際標準化
九州大学ナースのブランディング

- BPの試験的導入
- BP導入の障壁・促進要因の探索
- BP普及の評価検証
- 九州大学看護BPモデルの成果発信

研究拠点目的

- 九州大学病院看護部および企業、自治体との共同研究によりEBNの構築を行い、臨床における社会実装を目指す。
- 本拠点における研究成果の蓄積により、看護実践の標準化を行い、国内外にわけて九州大学ナースの発信を行う。
- 異分野融合研究、社会実装を目指す研究を推進できる若手研究者を育成する。
- 地域住民、および医療職者を対象に、セミナーや、公開講座など開催し、本拠点における研究成果の発表を行い、地域への還元を行う。

設置準備に向けたスケジュール



研究例 (連携研究)

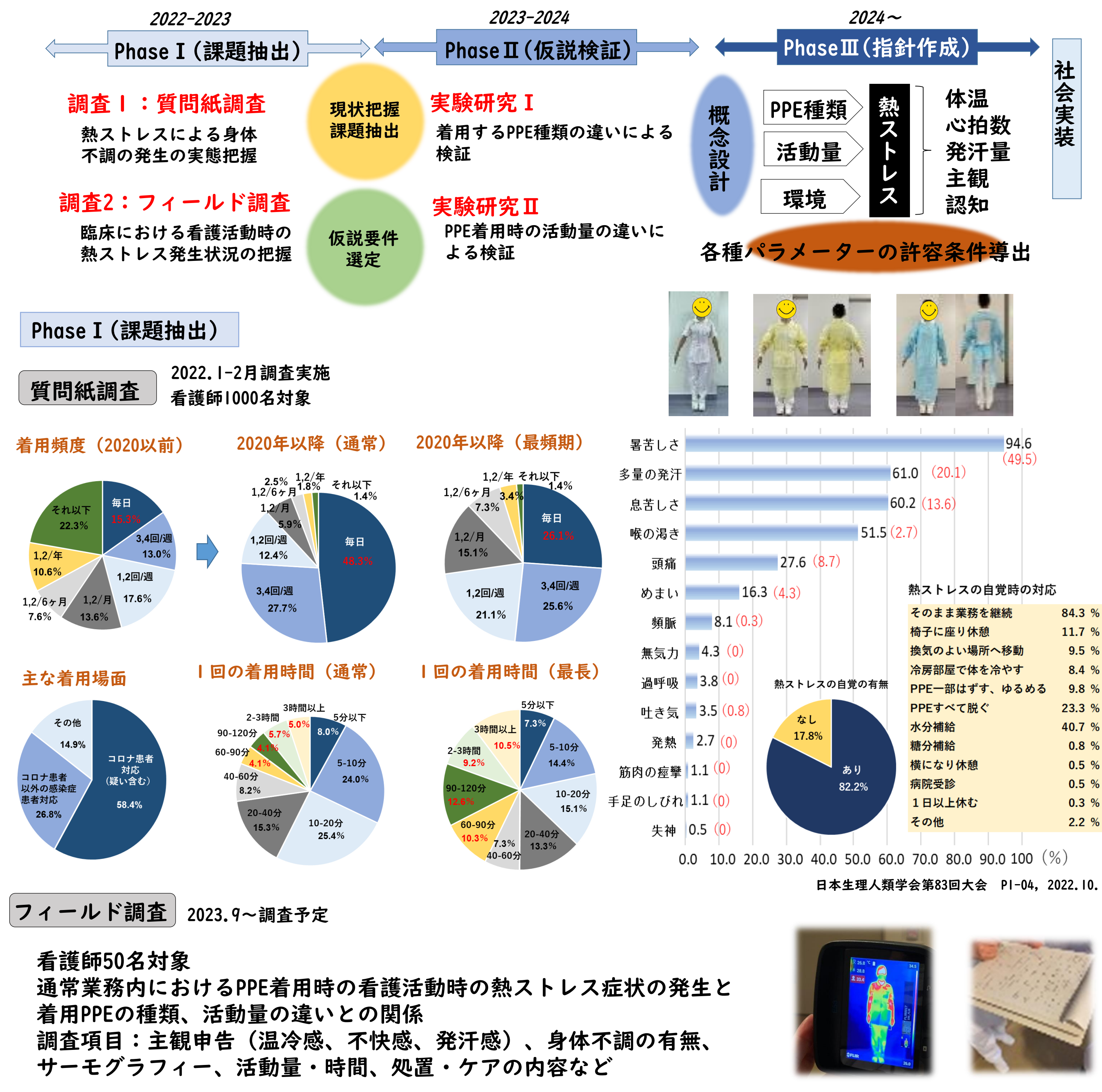
研究リーダー 橋口暢子
九大病院看護部 北7-2病棟 北11-2病棟

感染症個人防護具 (PPE) 着用による熱ストレス低減に向けた 指針作成

Introduction & Purpose

医療従事者は、全ての患者に標準予防策を講じるとともに、感染症患者からの二次感染を予防するため、感染症患者やその疑いがある患者と接触する場合、感染経路に応じ、また、処置やケアの種類により、マスク、手袋、ガウンなどの個人防護具 (Personal Protective Equipment: PPE) の着用が必須となる。しかし、PPEの熱不透透性により、通気が妨げられ、めまよや倦怠感、頭痛、多量の発汗といった身体への熱ストレスが増大する。PPE着用時の暑熱負担および認知機能に及ぼす影響を明かにし、看護師の生体負担を考慮したPPE着用条件の指針を提示する

Methods & Results



Conclusion (今後の予定含む)

フェーズ I の質問紙調査により、看護師が日常の業務においてPPE着用により、熱ストレスによる身体不調を自覚するものが80%以上と多いことが明らかとなった。今後、フィールドにて、熱ストレス発生とPPEの種類や活動量との関係について調査を行い、仮説要件を抽出を行う。仮説要件をもとに、条件設定を行い、Phase IIにて実験研究を行う。得られた結果をもとに、Phase IIIで熱ストレス発生に起因する各種パラメーターの許容条件を導出し、看護師がPPE着用における指針作成を行う。最終的には、その指針活用がPPE着用における看護師の熱ストレス軽減につながるかどうかの社会実装を行う。

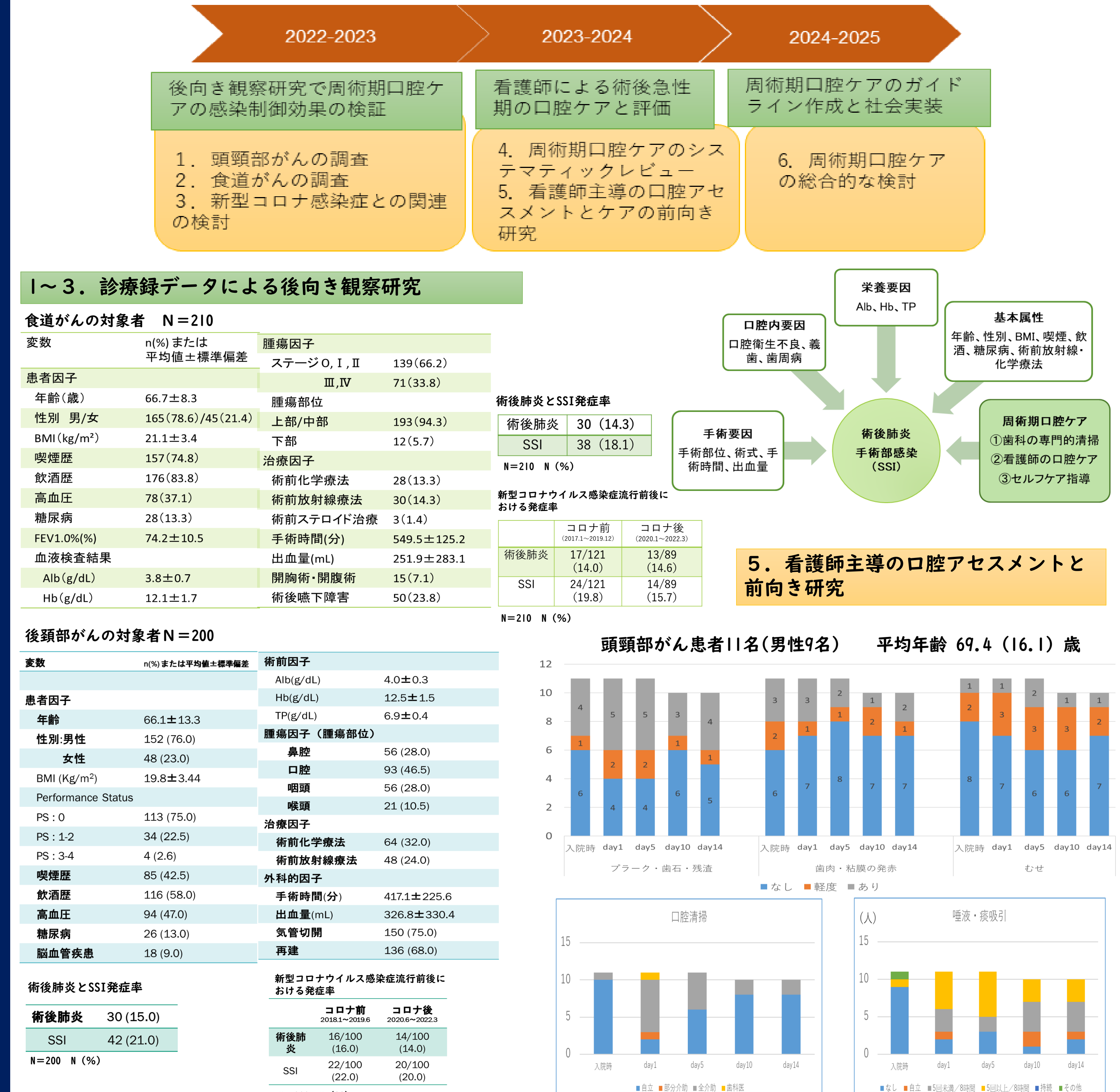
研究リーダー 藤田君支
九大病院看護部 南7-1病棟 北7-1病棟

がんの術後感染予防における周術期口腔ケア の効果の検討

Introduction & Purpose

術後肺炎や手術部位感染はがん手術後の生命予後に関わる重大な合併症で、周術期口腔ケアによる予防が実施されてきたが、頭頸部がんと食道がんは依然として術後感染の発症率が非常に高い。海外で推奨されている高濃度のクロルヘキシジンは国内では使用禁忌であり、非薬物療法による口腔清潔保持と細菌の低減化を試みる。また、口腔ケアは医療従事者と患者の交差感染リスクが高いため、新型コロナ感染症流行後は診療内容の一部縮小があり、術後感染制御への影響を確認する。

Methods & Results



Conclusion (今後の予定含む)

頭頸部と食道がんの後ろ向き観察研究では、術後肺炎よりSSIの発症率が高かった。両手術とも創部が口腔内細菌に暴露されやすいことが術後感染に寄与した可能性がある。新型コロナ感染症の流行前後での肺炎とSSIの発症率には統計的な差がなく、口腔ケアの一部内容の縮小はあったが、感染発症には影響しなかった。術式や合併症など交絡因子の調整後にさらなる検証が必要である。また、今年度は看護師による口腔ケアの実施記録を開始し、歯科専門職との連携を強化した前向き調査を進めている。今後はこれらの結果を総合的に検討し、臨床口腔ケアチームのガイドライン化を進めていく。

まとめ (今後の展望)

(まとめ/進捗)
九大病院看護部と研究チームを形成し、2つの研究テーマをモデルケースとして共同研究を開始した。臨床看護師の積極的参画により、臨床に根づく問題に的確に捉えた上で研究を推進することができ、実装研究への展開を目指す連携の基盤が形成された。まずは、これらの研究成果を蓄積し、九大看護の発信につなげるための方策について今後検討を進める。

(展望・課題)
□臨床やその他自治体等との連携可能な研究テーマを増やしていくための研究シーズの発掘
□共同研究の実施を通じ、臨床看護職者の研究マインド育成および拡大
□科研費以外の研究費獲得に向けた活動
□異分野、産学官連携研究の推進のために、本研究拠点の広報活動